

## ✿ 再考！ 小児看護専門看護師の実践と役割

● 特集にあたって ●

### 働く場が広がり、さまざまなキャリアをもつ 小児看護専門看護師の活動と今後を見据えて

2002(平成14)年に日本看護協会認定の小児看護専門看護師が誕生してから16年が経過し、その人数は228名(2019年3月時点)になった。当初、都市部の大病院で働く者が多かったが、障害児施設やリハビリテーション施設で働く者が増え、現在は訪問看護ステーション、特別支援学校、行政機関など多くの機関で小児看護専門看護師が活躍している。

小児看護専門看護師のキャリアにも広がりがあり、臨床のスタッフナースとして働くなかで部署をローテートして経験を積んだり、看護部や地域連携部門など担当のポジションに就いて組織横断的な業務を担ったり、看護管理者となってスタッフやケアの管理を行ったり、教育・研究機関で教職に就いたりしている。また、その働き方も、ライフスタイルや雇用機関のシステムに応じて、常勤から非常勤までさまざまである。

昨今、日本における高度実践看護師のあり方が議論され、ナースプラクティショナーの資格認定制度の整備も始まっている。また、2015(平成27)年10月に厚生労働省による「特定行為に係る看護師の研修制度」が開始されたことにより、専門看護師が行う「実践(直接ケア)」にも注目が集まっている。そもそも、日本の専門看護師(certified nurse specialist)は、米国のクリニカル・ナース・スペシャリスト(clinical nurse specialist)とナースプラクティショナーの機能を包含し、病院だけでなく地域のさまざまな場で、自律的に活動することを想定して創設された経緯があるが、これまでの専門看護師の活動は、6つの役

割のうち「相談」「調整」「倫理調整」「教育」への期待と実際の貢献が大きかった面がある。これまでの“縁の下の力持ち”の役割を発揮する基盤には、よりよいケアをしたいという探究心と細やかで粘り強い「実践」があるが、時にそれが何か特別な、ほかの看護師が行わない魔法のようなケアと誤解され、専門看護師に求められることもあったように思われる。

そこで本特集では、小児看護専門看護師の「実践」に焦点を当て、臨床看護のさまざまな場で行われる丁寧なケア提供の実際や、キャリア発展の実際を紹介する。そこには、子どもと家族に質の高いケアを提供しながら、その先に、組織や地域の小児看護の質の向上や発展につなげていこうという6つの役割の視点がみえてくることを共有したい。また、専門看護師が働く場や働き方を変化させながら臨床能力を高め社会に貢献していくためには、専門看護師自身の努力だけでなく、専門看護師の機能や能力を効果的に生かす管理者や、共に働く人々の理解と協力が必要不可欠となる。小児看護専門看護師が、共に働く看護職や多職種、そして管理者と協働しながらどのように活動しているかという点にも着目し、これからの看護職のキャリア開発のあり方についても考察していただけたら幸いである。

大阪府立大学地域保健学域看護学類准教授  
／小児看護専門看護師  
長田 暁子 Osada Akiko